

Title	民族學より見たる東歌と防人歌(松岡静雄著, 大岡山書店發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.2 (1928. 7) ,p.149(303)- 150(304)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0149">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0149</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的人物を以てし、その性行功過を縦横に解剖批判して居られるから、一度本書を手せる者はその津々として盡くるところなき興趣に馳らるゝまゝに巻を措くことを忘れ、後記と併せて二十四章一千頁に垂んとする大冊も遂に一氣に讀了せざればやまぬであらう。

由來英國憲法は我國初め大陸諸國の憲法とは異なり、憲法學者の所謂不文憲法と稱するものである。幾世紀の久しきに亙つて行はれ來つた事實上の慣習と、時に應じて制定せられたる幾多の單法とが英國憲法の主要なる淵源を構成して居るのであつて、我及び大陸諸國に見るが如き成文の憲法法典なるものを存しない。これ英國に憲法なしと稱せらるゝ所以であらう。隨つて英國憲法史を研究するに當つては、單に個々の憲法的規律が制定せらるゝに至つた直接の立法上の理由を皮相的に觀察するに止めず、博士自らが本書の序文に於て述べられて居られるが如く、進んで當時の政治的、社會的、經濟的、思想的環境をも深く検討するの要が一層多い。これ槓教授が本書を評せられたるが如く、英國憲法史が同時に又英國の政治史であり、社會史であり、經濟史であり、社會思想史であり、又歴代王朝史である理由である。我國が從來この方面の文献に缺くるところありし理由も、恐らくは英國憲法史の研究にかゝる特殊の事情が伴ふが爲めではなからうか。博士曩きに『英國國會の起原並にその進展』と題する研究あり。今又かゝる研究の困難を征せられてこの高著を世に公にせらる。獨り我が學界のみならず、汎く一般政治教育に資すること蓋し鮮少ではないであらう。

終りに臨み博士の篤學に對して甚大の尊敬を捧ぐると共に、後學菲才の身を以て博士の高著に對して敢て盲言を列れたる非禮を深謝する次第である(昭和三年二月記、長澤邦男)

### 民族學よ り見たる東歌と防人歌 (松岡靜雄著 大岡山書店發行)

萬葉集はわが最古の歌集であるといふ上からのみならず、その藝術的價値の上からも大いに尊重され、従つて文學としての萬葉集の研究は、從來さかんになされて來、その方面に於いて多くの好著が公にされた。しかしながら如何なる文學も人間の精神の所産であるかぎり、その作者の生活や環境や時代などを反映するのであつて、それがためその時代の理解に對して貴重なる資料となるのである。即ち藝術品としてこれを評價し、鑑賞する以外に、歴史家がこれを史料として利用することができる。殊に歌謠類は感情の純真を尊ぶが故に、その時代の精神生活を知る上に最もよき史料となるのである。けれども歌謠においてはその語句の解釋が困難なるがために、萬葉集のごときも從來歴史家によつてむしろ閑却され、史料として利用されることは少なかつた。しかるに最近における民族學の發展が、この萬葉集を民族學的に研究して史料としてこれを利用せんとするに至つたことは、まことに喜ばしきことであつて、さきに西村眞次氏の『人類學上より見たる萬葉集の研究』を手にしたる吾々は、今また松岡靜雄氏の『民族學より見たる東歌と防人歌』に接するを得た。

東歌と防人歌とは萬葉集の中においても最も純真なるものであ

つて、これは『アツマ人といふ總名を以て呼ばれた有名無名の民衆詩人』が、『些の虚飾もなく、些の忌憚もなく衷情を三十一音に託し、日常の國語を以て之を詠出した』ものであつて、『其巧智を弄せざる所に當代の民情が反映し、其斧鑿を加へざる所に當代の語法が發露』し、『我々上代文化の研究者に取つては他に得がたい好資料である』。しかしこれらの歌は萬葉集中その語釋の最も困難なるものであつて、その正しき解釋を得るためには、言語學についての知識を必要とする。すでに日本語學の著ある松岡氏は、この點において誠にその人を得たるものといふべく、本書においても言語學上幾多の新見解を提示されて居る。例へばアツマの語原に關して、これはアツミといふ語の音便で、綿津見神の裔と稱するアツミ(阿曇)族といひ、このアツマ人の居住する國であるが故に、東國をアツマと稱するのであるとなし、またサキモリ(防人)の意味は、邊防の義から出たといふ從來の解釋を排して、サキモリはセキモリ(關守)の轉で、所在の關に配置された守備隊であるとなしてゐる。これはほんの一例にすぎない。かゝる新見解は隨所に見らるゝのであつて、各歌を解釋しつゝ、なほ古今集の東歌や風俗歌の或ものまで添加し、最後にこれらの歌にあらはれた民衆の生活について民族學的研究を示された。實に本書は歌の解釋からみても、民族學の研究から言つても、幾多の創見をみるところの、萬葉集研究の好著といふべく、著者がその豊富なる言語學、民族學の知識をもつて、更に萬葉集全體に關する研究の公にされんことを望んでやまない。(松本芳矢)

### 綜合日本史概説 卷下(栗田元次著) 中文館書店

史學に於て綜合の必要であり、且つ大切であることは言ふまでもない。個々の人物の研究、個々の事件の研究、各時代の研究の上に立ち、明快なる史觀を以て、その相互の心的物的因果關係を把握し、之を巧に描寫し、明晰に記述するこそ史學者のなすべき本務であり、又最も至難な事業である。史學の研究の盛になると共に、或る時代の研究、個々の人物、事件の研究は益々多く發表されるが、之を綜合するの良著は未だ多く見ないのである。栗田氏のすでに綜合日本史概説上卷を出し、又其の下卷を刊行された事は誠に喜ばしき次第である。

本書は江戸幕府の設立に筆を起し、幕府政治の武斷政治より文治政治への變遷、幕政の停滞及び破綻を述べ、一方に於ては其の間に國民文化の興隆及び文運の移動、國民經濟の發達等を記述してゐる。故に本書は江戸時代に限らるゝものであつて、獨立して江戸時代史とも見らる可きものである。附録の國史の時代觀に於て、著者は一般社會的現象を包括する總體的普遍的特色を以て時代を區別し、古代は意志の時代實行の時代であり、上代は感情の時代藝術の時代であり、中世は信仰の時代宗教の時代であり、近世は理性の時代學問の時代であるとのてゐるのは、注意すべき一つの見方であると思ふ。又附録として文献目錄を附し、明治元年以後の編著者單行本として刊行されたものを組織的に記載し、且つ圖版讀法をも添へた事は初學者の爲に非常に便利なものである。